

『閻羅王授記經』寫經考

——天堂へのパスポート

玄幸子

はじめに

『十王經』に関する研究はすでに多くのすぐれた研究がある。とりわけ日本では塚本善隆（1931）¹を嚆矢とし、禿氏・小川（1962）²、小川（1984）³などの論考が早くから注目を集めた。また近年では単刊の專著として杜斗城（1989）⁴に始まり、その三年後には先行するほぼすべての研究成果を踏まえ更に総合的に集大成した Teiser（1994）⁵が出版された。その後も関連新資料の報告など各方面で新たな成果はみられるが、今回論及しようとする『閻羅王授記經』に特化して言えば、詳細な調査と検討を行った論考として張（2001）⁶が挙げられる。

ここでは本論に入る前に本稿で検討しようとする問題点について従来の研究状況を簡単に概括しておく。まず、日本での研究状況であるが、酒井（1937）⁷では東晉の『灌頂經』（帛尸梨密多羅譯）卷11「隨願往生十方淨土經」や『佛祖統紀』卷33の記述を根據に預修齋および亡人齋という2種の十王齋のうち預修生七齋は十王齋よりは起源が古いと、中有思想による預修齋の萌芽は南北朝時代には存したとした。さらに十王については後漢～南北朝、唐中期以降五代に性格の類似性が觀取され、「冥界信仰が個的のものとしてその立場を定めた」ことの意義を「國家的民族的統一の精神を失った個人的なものの分化竝立の時代」であったことに

¹ 「引路菩薩信仰と地藏十王信仰」『東方學報・京都』第1冊、『塚本善隆著作集』第7巻（京都：法藏館、1975年）に再録。

² 禿氏祐祥・小川貫弑「十王生七經讀圖卷の構造」『西域文化研究』5、257-296頁。

³ 小川貫弑「閻羅王授記經」『講座敦煌』第7巻「敦煌と中國佛教」（東京：大東出版社）、223-239頁。

⁴ 『敦煌本《佛說十王經》校録研究』、蘭州：甘肅教育出版社。

⁵ Stephen F. Teiser, *The Scripture on the Ten Kings*, Honolulu: University of Hawaii Press.

⁶ 張總「《閻羅王授記經》綴補研考」『敦煌吐魯番研究』第五卷、81-116頁。

⁷ 酒井忠夫「十王信仰に関する諸問題及び閻羅王授記經」『齋藤先生古稀祝賀會記念誌』、611-656頁。

求めつつ、現存の諸本を3類に分け、相互比較の結果、

中村本（原形） → 寶・續本（+藏川讚） → 佐藤本（+圖）⁸

という成書過程を示した。この流れはその後日本における研究のなかでほぼ踏襲され、現在のところ管見の限り新たな観点は提示されていないようである⁹。

一方、中國における研究状況を見れば杜斗城（1989）では甲乙2類に分けたあと、テキスト成立の過程については言及せず、有圖有讚の甲類は、變文や講經文、後の詩讚類文學につながる佛道儒三教を捏ね合せた宣傳性の強い「繪解き」であるのに對して、無圖無讚の乙類は寫經者が自身のために「功德」を積むべく寫經した完全に形式的なものであるとしている¹⁰。さらに張（2001）では、單純な2分類ではもはや全面的状況を反映できないとして、その注の中で次のように述べる¹¹。

…… 禿氏祐祥與小川貫式曾將這兩種文字作對比，來探討其發展演化，即經文如何由簡至繁，由寫至圖。但此論證應在年代考訂的基礎上作出。且其所用簡本是日本書道博物館清泰三年（936）本，時間較晚。而圖本爲 P.2003 卷，亦無年代。當然其對多數經卷的年代推測大致不誤，但其立論之據稍覺薄弱了一些。

つまり、簡単な經文が讚文などを加えた複雑なものへ、經文のみであったものが圖を加えられた形へと如何に変わったかをテキストを比較検討し述べる禿氏・小川の論考について、簡本である中村本は清泰三年（936）本であり成書年がかなり遅いこと、一方附圖本である P2003 には年代が記されていないことなどから論據が弱いと指摘しているのである。

⁸中村本：中村不折舊藏（現臺東區書道博物館所藏本）。寶・續本：高野山寶壽院本（大正藏圖像第7卷）・大日本續藏經本。佐藤本：佐藤汎愛氏舊藏（現久保總美術館所藏本）。

⁹例えば小南一郎氏は次のように述べる：「敦煌發見の「十王經」のテキストが大きく二つの種類に區分できるであろうことについては、すでに多くの人たちが指摘するところであり、わたしも、前論でその考えを援用した。その二種類のテキストとは、第一種類のものは、地獄の十王とそこをおとずれる死者たちを畫いた彩色の圖が付いているテキストであり、第二種類のものは、そうした圖が付かないテキストである。第二のテキストの方が、第一のものに比べて、少し早く成立した可能性があるとの推測も、前論に記したところである」小南一郎『『十王經』の形成と隋唐の民衆信仰』『東方學報・京都』第74冊（2002年）、242頁。前論とは小南氏の以下の論文を指す：「十王經をめぐる信仰と儀禮——生七齋から七七齋へ」、吉川忠夫編『唐代の宗教』、京都大學人文科學研究所研究報告、159-194頁。

¹⁰「甲類：有經文，有讚文，有圖者。如 P2003、P2870、S3961。乙類：有經文，無讚文，無圖者，如 2489、S2815、S3147、S4530、S4805、S4890、S5544 等。……甲類是一種揉合了佛道甚至儒家思想的宣傳性很強的“畫本”，它可能被作為宣演的“底本”，而乙類只是當時的人們為“自己”作“功德”而抄寫的。」（杜斗城（1989）148、151頁。）

¹¹張（2001）112頁、注72。

本稿では、以上の先行研究を踏まえた上で再度テキストの構成などから検証をすすめ、従来餘り注目されてこなかった『金剛經』との竝寫狀況を確認しつつ、異なった角度から『十王經』異本の成書過程を改めて見直すと同時に『閻羅王授記經』の特徴を明らかにすることを目的とする。

一、テキスト比較

すでに酒井（1937）では中村本（現書道博物館所藏本）と佐藤本（現久保總記念美術館所藏本）、禿氏・小川（1962）では書道博物館所藏本とP2003、杜斗城（1989）ではS3147とP2003について全面的かつ詳細に比較對照検討をしているので、ここではとりわけ問題となる箇所についてのみ検討していく。

附圖資料としては經讚圖すべてをもつ完本P2003を、經文のみの資料としては道眞の手になる最も簡潔なS3147を取り上げ比較對照してみよう。同テキストを對照する杜斗城（1989）を隨時参照しつつ原文に基づいて検討する。

P2003は誰もが指摘するように、まず生七齋を述べ、その後に七七齋について詳しく述べる。具體的に示せば、次の通りである。

【P2003】

（前略）

若有善男子善女人、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷，預脩生七齋者，每月二時，* 1 供養三寶，所（祈）設十王，脩名納狀，奏上六曹。善惡童子奏上天曹，地府官等。記在名（冥）案，身到之日，便得配生快樂之處，不住中陰四十九日。不待男女追救命。過十王若闕一齋，滯在一王，留連受苦，不得出生，遲滯一年。是故，勸汝作此要事，祈往生報。* 2

（中略）

尔時佛告阿難，一切天龍八部及諸大臣、閻羅天子、太山府君、司命司錄、五道大神、地獄官等行道大王，當起慈悲法，有寬縱可容一切罪人。慈孝男女，脩福薦拔亡人，報生養之恩。七七脩齋造像，以報父母恩，令得生天。

（中略）

尔時琰魔法王，歡喜踊躍，頂禮佛足，退坐一面。佛言：此經名為閻羅王授記四衆預脩生七往生淨土經。汝當流傳國界，依教奉行。

（中略）

佛說十王經一卷

これに對して、S3147は讚文以外にも阿難が佛に閻羅天子の因縁を尋ねる場面などが見られないなど、全體的にかなりコンパクトになっているが、逆に一部P2003に見えない部分が増えている箇所がある。増加部分を太字で示すと次の通りである。(表現の異なる部分には下線を付す。さらに増加箇所は*1、*2でその對應箇所を示す。)

【S3147】

若有善男子善女人、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、預脩生七齋、毎月二時、
*1 [十五日、卅日。若新死、依一七計至七七、百日、一年、三年、竝請
此十王名字、每七有一王下件察。必須作齋、功德有无即報天曹、地府。]
供養三寶、祈設十王、唱名納狀。狀上六曹、善惡童子奏上天曹地府冥
官等、記在名案。身到日時、當便配生快樂之處、不住中陰四十九日。

(若し善男子善女人、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷が生七齋を豫め修めるなら毎月二度、十五日と30日にせよ。若し新たに亡くなったのなら、一七から數えて七七、百日、一年、三年まで、毎回この十王の御名を請えば、7日ごとに一王の下りきたりて取り調べを行う。必ずやお齋をしなければならず、功德の有無が天曹、地府に報告されるからである。三寶を供養し、十王を祈り設けて、その御名を唱し書狀(功德を記した上書)をお納めする。書狀は六曹に上り、善惡童子が天曹地府冥官等に奏上して名案¹²(名簿)に記される。そして壽命が盡きればすぐさま快樂の處に配され再生して中陰四十九日に留まることもない。)

身死已後、若待男女六親眷屬追救命、過十王、若闕一齋、乖在一王、并新死亡人、留連受苦不得出生、遲滯一劫。是故、勸汝作此齋事。

(死んだ後に、もし子供や親族が追齋を行い、十王を過ぎるのにもし一齋でも缺かしたならその王のところに隔離され、そしてその亡人はとどめおかれて苦しみを受け生まれ變わることができず、長い間遅れることとなる。そのために、この齋事を行うようにと勧めるのだ。)

*2 [如至齋日到、无財物及有事忙、不得作齋、請佛延僧建福、應其齋日、下食兩盤、紙錢餵飼。新亡之人并隨歸在一王、得免冥間業報、飢餓之苦。若是生在之日作此齋、名爲預脩生七齋、七分功德盡皆得之。若亡沒已後男女六親眷屬爲作齋者、七分功德亡人唯獲一分、六分生人將去。自種自得、非關他人與之。]

(もし齋事を行う日になって、お齋を行うだけの財力が無かったり、多忙でお齋を行えないなら、佛に延僧建福を請うて、そのお齋の日に2皿の料理を準備し、紙錢で(亡者が)食べ物を得るようにせよ。そうすれば亡くなった人もそのまま一人の王のところに歸着して冥間の業報や飢餓の苦しみを免れる。もし生前にこの齋事をすれ

¹²あるいは“冥案”(冥土にある生前行狀記録)か。

ば、その名を預脩生七齋といって七分功德をすべて得ることができる。もし死んだ後に子や親族が齋事を行えば、七分功德は亡き人はその一分を得るのみで、残りの六分は生きて齋事を行ったものが持って行く。自ら植えた種は自らが得るのであり、他人に與えることはできない。)

尔時普廣菩薩言：若有善男子善女人等，能脩此十王逆脩生七及亡人齋，得善神下來敬禮凡夫。凡夫云：何得賢聖善神禮我凡夫。一切善神并閻羅天子及諸菩薩欽敬，皆生歡喜。]

(この時普廣菩薩が言った：もし善男子善女人などがよくこの十王逆脩生七及び亡人の齋事を修めることができるなら、善神が下りきたりて凡夫に禮拜するだろうと。凡夫言う：賢聖善神が私のような凡夫にどうして禮拜なさることがありましようぞ、と。すべての善神、そして閻羅天子と諸菩薩が敬い慎み、そこで皆喜びを生じた。)

(中略)

尔時琰魔羅法王歡喜頂禮，退坐一面。佛告阿難此經名：閻羅王授記令四衆預脩生七及新死亡人齋功德往生淨土經。汝等比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、天龍八部、鬼神諸菩薩等、當奉持流傳國界，依教奉行閻羅王受記經

界比丘道眞受持

以上を一見すれば明白なように、S3147では生七齋と七七齋を分けることなく混交して説明している。さらに生七齋は月々の15、30日に行い、七七齋は初七から七七まで、百日、一年、三年に設けよと齋日を明確に示し、諸事情で齋事を設けることができない場合の簡易法なども具体的に指示、さらにこれが凡夫のためのものであると明言しているのである。

さて、この異同箇所を勘案すれば、單純に「簡」から「繁」、「寫」から「圖」への變化のみではとらえきれないことは明白である。さらに「民衆化」「俗化」という要素を加える必要がある。また、張(2001)で指摘されるように、甲乙の二分類ではまとめられないバリエーションが數多見られる。次にいくつかのバリエーションを併せて比較對照してみよう。

まず、S2489であるが、圖讚がなく經文だけで構成され、その内容はS3147とほぼ同様といえるが、一部むしろP2003系統かと思われる部分を含む。それは、前述で特に取り上げた以下の部分である。

【S2489】若有善男子善女人、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷，預脩生七齋者，每月二時，供養三寶，祈設十王齋，脩名進狀__上六曹官。善業童子奏上天曹，地府__等。記在名案，身到之日，當便配生快樂之處，不住中陰四十九日。__待男女追救命。過十王若闕一齋，乖在一王，留

連受苦，不得出生，遲滯一年。是故，勸汝作此要事，祈往生報

(中略)

閻羅王經一卷

下線部は P2003 の同箇所と異同がある点を示すために引いたものだが、巻末の經題を除いては圖讚のない S3147 にほとんど一致することから、この S2489 は P2003 類(附圖讚類)と S3147 類(經偈文類)の中間的な位置にある資料だといえよう。

書寫年に關しては紀年がないためわからないが、書寫した人物はその「安國寺患尼弟子妙福、發心敬寫此經一七卷。盡心供養」という題記から安國寺の尼妙福であると知れる。妙福については Teiser (1994) で、895 年頃に靈修寺の信徒となり、その後安國寺¹³に移った尼僧の可能性が高いとされ、よっておよそ 885 年頃に生まれ、病氣に悩まされ十王經を書寫したのは 930~960 年と推察している¹⁴。張(2001)においても、10 世紀半ばに書寫されたと結論づけており、ほぼ同じ見解を示している¹⁵。妙福書寫の本經は他に北京國家圖書館藏 BD08045 (字 045)¹⁶も見られるが、文面はほぼ S2489 と同じであり、同じテキストに基づいて書寫したようである。

次に D_x06099 + D_x00143¹⁷を取り上げる。この寫本はおそらく従來の分類の枠に入れることができないくらい特異である。S3147 と比較對照し異同のある箇所に下線を付す。空白下線部は S3147 だけに文字が現れる箇所を示している。さらに特に注意すべき箇所に記號 ABCD を入れて後述する。

¹³歸義軍期敦煌五尼寺として靈修寺、安國寺、大乘寺、普光寺、聖光寺がある。

¹⁴“In conclusion, it is a strong possibility that a young or underage Miao-fu sought ordination as a novice at Ling-hsiu ssu around the year 895, later moved to An-kuo ssu, and as an old woman there commissioned The Scripture on the Ten Kings. If she was roughly ten years old in 895, she would have been born around 885, and between 930 and 960 she may have suffered from the unspecified ailments she hoped the copying of the text would relieve.” (p.132)

¹⁵101 頁。

¹⁶『閻羅王授記經』關連の國家圖書館藏資料の番號對照表は次の通り。

1. BD00529V = 荒 029
2. BD01226 = 列 026
3. BD04544 = 崗 044
4. BD06375 = 鹹 075
5. BD01546 = 來 046
6. BD08045 = 字 045
7. BD08066 = 字 066
8. BD08237 = 服 037
9. BD08888 = 有 009
10. BD 新 1537 = (無)

¹⁷この 2 資料の接合については西陲發現中國中世寫本研究班 2011 年 12 月 19 日例会で「『閻羅王授記經』俄藏第 11-17 冊所收資料整理記」と題して報告を行ったが、その後の調査の過程で黨燕妮「《俄藏敦煌文獻》中《閻羅王授記經》綴合研究」『敦煌研究』2007 年第 2 期を知り得た。當該論文の中で接合後の校録もすでに行われているが、録文に異同もあり、本稿では別の視点からのアプローチを行うため再度ここで全文を録することにする。なお『閻羅王授記經』關連俄藏未同定資料として次のものが挙げられる。D_x00931、D_x03906 + D_x03862、D_x04560 + D_x05269、D_x06099 + D_x00143、D_x06611 + D_x06612、D_x07919 + D_x07960 + D_x07909 + D_x08062

【Dx06099 + Dx00143】

Dx06099 4-4 中

貴家免其罪過若有善男子

善女人比丘比丘尼優婆塞優

婆夷預脩生七齋每月 ____ 十五日

盡日 每月 新死亡人 依一七計至七七

百日一年三年竝須 各 請此十王名字

每七有一王 __ 檢察必須作齋 告何功

Dx06099 4-4 左

德即報天曹及以地府功德有無 供養

三寶祈設十王唱名納狀狀上六曹官等 _____

記在名案身到之日時當 __ 配生快樂

之處不住中陰四十九日身死已後若

侍（待）男女六親眷屬追救命過十王

若羅閻王 閻（闕）一王 齋者乖在一王 _____ 留

Dx06099 4-2 中

連受苦不得出生遲滯一年 是

故勸汝作此 要 事如至齋日 __ 无 錢

作齋或若 事忙 作齋不得 者請

佛發願應其齋日下食兩盤紙

錢兩觀新死之人 及巡齋王 歸在一

處得免冥間 ____ 飢餓之苦 及業

Dx06099 4-2 左

報罪祈往生報 _____ A

尔時地藏菩薩 _____ B _____ 陁□尼菩薩金剛

藏菩薩文殊師利菩薩彌勒菩

薩 _____ B' _____ 等 讚歎 世尊 愍念 凡夫說此妙

經拔死救生頂禮佛足

尔時二十八重一切獄主與閻羅天子

Dx06099 4-1 左

六道冥官禮拜發願若有 衆生

及 比丘比丘尼優婆塞 優 婆夷若

造此經 讀誦 一偈 __ 當免其罪 __ 送出

地獄往生天 道 不令繫滯受 之 苦

惱 尔時間 [羅] 天子以偈白佛
南无阿波羅 日度數千河 衆生无定相

ㄇx06099 4-2 右

猶如水上波 願得智 [慧] □ 漂輿 (與) 法輪河
光明照世界 巡歷悉經過 普拔衆生苦
降鬼攝諸魔 四王行世界 傳佛脩多羅
凡夫脩善少 顛倒信邪多 持經免地獄
書寫過灾河 超度三界難 永不見夜叉
生處登高位 富貴命延多 至心讀此 [經]

ㄇx06099 4-3 右

天王恆護那 欲得无罪苦 莫信邪師卜
祭鬼煞衆生 爲此入地獄 念佛把真經
應當自誠勗 手把金剛刀 斷除魔衆族
佛行平等心 衆生不具足 脩福似微塵
造罪如山嶽 欲得命 [延長] 當脩造此經
能除地獄苦 往生豪貴家 善神恆守護

ㄇx06099 4-3 中

造經讀誦人 忽尔无常至 諸佛自來迎
天王常引接 携手入 [金] 城
尔時 C 佛告阿難一切龍神八部四衆閻羅天子
太山府君司命司錄五道大神地獄官典行
道天王當起慈悲皆發願言法有寬
縱一切罪人慈孝男女追齋脩福濟

ㄇx06099 4-3 左

拔亡人七七脩齋造經造像報父母恩
及兄弟姊妹奴婢等得生天道 閻羅法
王白佛言世尊我發使乘黑馬把黑幡
著黑衣檢亡人家造何功德唱名納狀 抽
出羅罪人不違誓 [願] 伏願世尊聽說
檢齋十王名字

ㄇx06099 4-4 右

第一七齋秦廣王下 第二七齋宋帝王下
第三七齋初江王下 第四七齋五官王下
第五七齋閻羅王下 第六七齋變成王下

第七七齋太山王下 百日齋平正王下
一年周齋都市王下 三年齋五道轉輪王下

十 齋具足免十惡 罪 放其生天我 當

Δx06099 4-1 右

令四大夜叉守護此經不令陷沒稽
首世尊 獄中 罪人惣是用三寶財物

喧 受罪識信之人可自誠慎勿犯三
寶財物罪報難容見此經者應當
出地獄因 尔時□羅法王歡喜頂
禮 退坐 一面 白 佛言 世尊當何名

Δx06099 4-1 中

D此經我等四部諸□□何奉持佛
告四部衆 此經名爲閻羅王受記四
衆逆脩七齋 往生淨土經
此經云何逆脩尔時閻羅王說逆脩
七齋四部諸衆諦聽諦聽逆脩齋

Δx00143

者在生之日請佛延僧設齋功德
无量无边亦請十王請僧七七四十
九人俱在佛會飲食供養及施
所愛財物者命終之日十方諸佛
四十九僧爲作證盟□罪生福善惡
童子悉皆歡□□便得生三十

Δx00143V

三天 汝當奉持流布國界依教
奉行

佛說 閻羅王受記經

經

佛說佛說羅王

全體的に S3147 類（經偈文類）系統であることは明確である。その上で、顕著な特徴と認められるのは七七齋と逆修七齋の説明箇所である。A 部で S3147 にみえるのは次の通りである：

若是生在之日作此齋者，名爲預修生七齋，七分功德，盡皆得之，若亡沒已後，男女六親眷屬爲作齋者，七分功德，亡人惟得一分，六分生人將去，自種自得，非關他人與之。尔時善廣菩薩言：若有善男子、善女人等，能修此十王逆修生七及亡人齋，得善神下來，禮敬凡夫，凡夫云：何得賢聖善神，禮我凡夫。一切善神并閻羅天子及諸菩薩欽敬，皆生歡喜。

また、Bの箇所では、「龍樹菩薩 救苦觀世音菩薩 普廣菩薩 常悲菩薩 常慘菩薩」さらにB'には「普賢菩薩」の名がS3147では見られる。逆に、Cの「佛告阿難～得生天道」とD以下の下線部はS3147では認められない。この状況をまとめると、Dx06099 + Dx00143では、先に七七齋について記述をした後に、最後に問答形式で逆修生七齋（預修生七齋）を説明しており、その具体的な方法まで記載されている。亡人のための七七齋と預修生七齋を取り混ぜて説明するS3147のような形式よりよほど整合性があると思われる。7日ごとに7人の僧を招いて亡き人を供養するというのは小南（2000）で紹介されるよう¹⁸に、唐代玄宗期ではもっぱらポピュラーな状況であったようであるが、Dでは、生きている間に同様に七七四十九人の僧を招いて供養をすれば命盡きるときにその四九人が生前の無罪生福を証明してくれると説明するのである。かような説明の展開からは、むしろ亡人七七齋が先行し生七齋がそれに倣って勧められたという解釈が自然なように思われる。

さらに細かく異同をみれば、例えば“必須作齋告何功德，即報天曹及以地府功德有無”がS3147では“必須作齋，功德有無即報天曹地府”となり、“是故勸汝，作此要事，如至齋日，无錢作齋，或若事忙，作齋不得者請佛發願”がS3147では“是故勸汝，作此齋事，如至齋日到，无財物及有事忙，不得作齋，請佛延僧建福”となるが、接續詞“及以”の使用、“報”の二重目的語構文（VOO）、“無錢作齋”（有無動詞＋N＋V）“作齋不得”（VO 不得）などの語彙、語法は唐代口語の特徴をよく示しており、S3147に比べ一般民衆にとって理解しやすい文體を使用する傾向が見られる。

しかし、これらの特徴は成書書寫の年代を明確するには決め手とはならない。やはりバリエーションの一つとしてとらえておく¹⁹。

最後にP3761は小型のブックレットである。圖は付されていないが、經文は附圖完本のP2003とほぼ同じである。よって讚を含む。P2003との異同はわずかに

¹⁸184頁に玄宗期の宰相姚崇の遺令を引く中に、「もし、正しい道に完全に依據することが困難で、俗情（世間さまの気持ち）にも配慮せねばならぬのであれば、初七日から終七日まで、七人の僧を招いた齋を設けることは認めよう。」とある。

¹⁹黨燕妮（2007）では“由此写本經末閻羅王說逆修七齋的一段經文，可知其較其他写本年代要晚，其偽經的特征更加明顯。”（108頁）とするが、偽經の特徴がより明確になっていることはさておき、成書年期が他の資料よりも遅いとするのは根拠が希薄であろう。

次に示すとおり。残念なことに、書寫未了のため、「善神常守護」までで終了している。さらに、その後は本来なら讃文が續くはずなのだが、P2003とは全く異なる「若犬吠獄／善男子若」8文字を二行に分けて書寫したあと空白のままとなっている。讃文の書き方に特徴があり、書き進むにつれて最初の數文字を大きく書いて、餘白がなくなり残りを小字で2行がきをする場合が多い。これは、出だしが口から出れば後は樂にでるため、そのような便宜を圖って書かれたものであろうか。いずれにせよ、用途について考える必要がある。

【P3761】

(異同箇所)

當得作佛，名曰普賢王如來 → 當得作佛，號曰普賢王如來
處斷冥間，復于此會 → 處斷冥間，復於此會
我記來世尊國 → 我記來世寶國
汝等人天，應不疑惑 → 汝等人天，不應疑惑
煞父害母，破齋破戒 → 煞父害母，破齋____
供養三寶，所設十王 → 供養三寶，祈設十王
送出地獄，往生天道 → 送出地獄，得生天道
南无阿羅河 → 南无阿羅河 南无阿羅河
天王恆記錄，莫煞祀神靈 → 天王恆記錄，欲得无罪咎，莫煞祀神靈
願執金剛眞惠劍 → 願執金光眞惠劍
能持地獄苦 → 能除地獄苦

圖が無いだけで、經文偈讚はすべてそろっている P3761 がある一方で、圖のみの資料も存在している。英國博物館斯坦因繪畫 80.Ch.cii.001 + P4523 がそれである。本稿では、附圖本については、ほとんど言及しないが、P3761 との關連を指摘する研究もあるので、現段階での私見を簡単にまとめておく。

従來の研究成果をふまえれば、附圖本は大きく2種類に分かれる。開頭の圖が地藏菩薩を中心に置くものと、佛が閻羅王に受記を與えている說法圖である。地藏菩薩を中心に置く場合は、第五閻羅王の場面で必ず地藏菩薩と道明和尚（あるいは片方）が描かれている。また、早期に Teiser (1994) で指摘されていることに、S3961 の最後の救濟の場面に目連救母が描かれており、さらに張 (2001) では、十王經繪圖の注解とされる P3304V の最後に“大目乾連於此鐵床地獄，勸化獄卒救母時”とあることから、この二資料の關連性に言及している。死後の救濟という點で目連救母の故事は十王經と深い關連を持つことは當然推察されよう。圖中に描かれるのが、手に佛像や經を持つ善女人が多く、寫經の願文で祈られるのは、妻

や母といった女性が多いのも、この関連性を裏付けているかもしれない。

図のみの英國博物館斯坦因繪畫 80.Ch.cii.001 + P4523 と文のみの P3761 とを関連づけてみたいと誰しもが思うところであろう。が、確たる證左がない時点ではあくまでも推量の域を出ない。むしろ、当時の著名な繪師である董文員が供養のために作畫した久保惣記念美術館藏本のような場合を考慮し、S3961 (+1919,0101,0.78 + 1919,0101,0.213) のように畫の間に讚文を後から書き込んだような場合を考えれば、これから經文を書き入れるところだったか、あるいは畫見本のような位置づけでとらえられるか、様々な可能性が考えられよう。畫見本あるいは手本という考え方から、經文のみの P3761 も逆に圖に書き入れるための經文の見本(手本)を作成しようとした意圖が読み取れるかも知れない。いずれにせよ、現段階で明確な答えを出すことはできないようである。

以上、數點典型的なバリエーションの實際を検討してきたが、ここで明確に結論づけることができるのは、これらの資料が決して一直線上には並び得ないという事實である。最初に挙げた中村本(原形) → 寶・續本(+藏川讚) → 佐藤本(+圖) という系譜はいったん白紙に戻すことが必要であろう。その上で、實際の儀禮の歴史とは別に、殘された文獻自體のそれぞれの特徴性格意味を確認した上で、全體をとらえ直してみたい。

二、亡者救濟の寫經と自己救濟の寫經

亡者七七齋の供養として書寫された『閻羅王授記經』は、翟奉達がその妻馬氏のために七七齋に當たって、關連の經文を7日毎に書寫したことがよく知られている。3分割されてしまっていた資料を接合し完本とした北圖藏 8259(崗 044) + 天津藝術博 4352 + P.2055 がそうである。これについてはすでに多くの論考が見られるので、簡単に書寫リストのみを挙げると次の通りである。

- 一七 無常經一卷
- 二七 水目觀音經一卷
- 三七 呪魅經一卷
- 四七 天請問經一卷
- 五七 閻羅經一卷
- 六七 護諸童子經一卷
- 七七 多心經一卷
- 百日 孟蘭盆經一卷
- 一年 佛母經一卷

三年 善惡因果經一卷

すでに多くの指摘があるところだが、七七齋での重要な五七齋日に『閻羅經』を書寫し他の齋日に書寫された經典がほぼすべて偽經である点などからも、この七齋の供養が中國的文化背景の中で民間に流行し發展してきたことが看取される。

そして、この亡人七七齋と同様に、生前から死後世界へ向けて供養を行う生七齋も民間で大いに受け入れられた状況は、生七の實踐者の典型として八五歳老人寫經の状況をみることで知りうる。この2つの實踐例は、張(2001)でも、亡人修福の典型として翟奉達寫經を挙げ、生七の實踐者の典型として次の八五歳老人寫經を挙げて、好對照であると述べるように、まさに『十王經』關連の史料として、必ず俎上に上がる好例なのである。

そこで S5544 は先行研究で必ず言及される史料といえる。また Teiser (1994)、張(2001)では未見、所在不明となっている散 262 は現在『敦煌祕笈』に羽 073-2 として收められている。これらはすべて張(2001)で指摘されるように、同一老人の手になり、西川戈(過)家眞印本に依って書寫されたものである。張(2001)では諸資料を總括した上で、『金剛經』と『閻羅王授記經』の組み合わせがおそらく 908 年以前にはもう出現していただろうと考察している²⁰。さてここまでの指摘は張(2001)でもみられるが、では何故竝寫されたのかという點に於いて先行研究で言及するものはほぼ見られない。

竝寫される理由を考察するにあたり見るべき史料として P2094 「持誦金剛經靈驗功德記/ 開元皇帝讚金剛經功德」(908 年)がある。まず、題記であるが、

于唐天復八載歲在戊辰四月九日，布衣翟奉達寫此經，讚驗功德記，添之流布，後爲信士兼往亡靈及見在父母合邑等，福同春草，罪若秋苗，必定當來，具發佛會。

とあり、時の文人であり著名な曆學家であった翟奉達によって書寫されたことが読み取れる。また、最初の行には「奉達書」の三文字が筆により消された跡が確認できる。

さてこの史料の内容であるが、題名の通り『金剛經』にまつわる靈驗譚を集めたものである。全 19 話の靈驗譚が収録される。『法苑珠林』『太平廣記』中に重なる故事もあり、恐らくは初唐中唐にすでに流布していた史料の採録と考えられ翟奉達のオリジナルではない。

文書頭の「奉達書」が消されていたのも、このような事情を反映したものであろうか。あるいは所有者が變わったときに抹消されたものかも知れない。

²⁰97 頁。

次に関連の靈驗譚を抜粹してみよう。まずは、第4條 趙文昌の故事である。

開皇十一年，太府寺丞趙文昌身死，唯一上願，家人不敢即斂。然昌遂至閻羅王，問昌曰：從生已來，作何福業？昌曰：更無餘功德，唯常誦持**金剛般若經**。王聞合掌，恭敬讚言：善哉！受持**金剛般若**，功德最大，不可思議。即語執人曰：汝更勘案，勿錯將來不？其人實錯將來不？聞即語昌曰：可向經藏中，取**金剛般若經**來。令一人引昌西南下至經藏。所見大舍數十餘間，甚精麗。其中經滿，竝金軸寶袂，廣嚴妙好，華飾不復可言。昌乃一心閉目云：大德最爲弟子一經。昌怕懼此非**般若**。求其使人請換。不肯，昌即開看乃是**金剛般若**。將至王所，令執人在西，昌在東立，誦**金剛般若經**一遍。竝得通利。王即放還，約束昌受持此經，實莫廢忘。仍令一人引昌送出門。便見周武帝禁在門東房內，喚言：汝是我國人也，暫來至此，須共語。昌即便見武帝，再拜。武帝：汝識我不？昌言：臣昔曾任伏事衛陛下。武帝喜云：卿乃是我故舊也。汝可還家，爲我向今帝論說道，我諸罪竝了。爲（唯）有滅佛法事未了。當時爲衛元嵩讒言，不得。久禁在此。未知了其。昌問武帝：衛元嵩是三界外人，非閻羅王所管攝，爲此不能追得。汝還家，爲我從今帝乞少許功德，救拔苦難，始敢望了。昌還家更得甦活。已經五日，其患漸損。具以此事奏聞。文帝知，即爲出勅國內諸寺師僧爲周武帝三日持齋行道，轉誦**金剛般若經**亦錄入史記。

次に、第5條、遂州の人の故事は、

遂州有一人貞觀元年死，經三日得活。說言：初死之時，被人遮逐，同伴數人至閻羅王所。中有一僧，王見先喚：師來，一生已來，修何功德？師答言：唯誦**金剛般若波羅蜜經**。王聞即起合掌讚言：善哉，既是受持**金剛般若波羅蜜經**，當得昇天。何因錯將來至此。王言未訖，即見天衣下來，引師上天去也。王乃覆坐，次問遂州人：汝等從昔已來，作何福報？云：一生已來，所誦經典、好習庾信文章、諸子集錄。近來學誦**金剛般若經**，猶自未得。王：大罪人，汝見識不？報云：雖讀庾信文章，實不識面。王即遣示苦人，乃見大龜，一身數頭，人言：此是庾信。龜去少時，王言：此人學誦**金剛般若**，且令放出來。見一人云：我是庾信。生存之日，好引諸經，用作文章，或生誹謗，毀訾經文。今受大罪，報向見龜刑。是以甦活，說此因緣。眾人傷悲，悉知是實。其遂州人土地多是移人，獵生害命充食。當時知見，共相識斷除殺害。因得發心，悉共受持**金剛般若經**，信受供人恭敬。

上記はいずれも死して閻羅王のところへ行くも生前『金剛般若經』を受持していた御利益を受けて生き返る話である。ここに明らかに冥界譚と『金剛經』とのつながりを見ることができる。さらに『金剛般若經』の靈驗あらたかな話が續いた後、最後に

以前前件驗之，假令有人將三千大千世界七寶持用布施者，不如流傳此經，功德最勝。若有人書寫金剛經，受持讀誦，亦令餘人書寫流布，譬而（如）一燈燃百千萬燈，幽冥皆照，明終不絕。若能抄寫此文勝於寺壁上者，功德無量無邊，不可思議。

と締めくくり、「△開元皇帝 讚金剛經功德」の讚文が續いている。書寫および讀誦によって伝えていくことを最良とする姿勢は、いかにも前世紀から同時期にかけて流行した「勸善經」「新菩薩經」などと機軸を同じくするものである。

このP2094は更に4種の眞言、2種の呪がつづき、前掲の題記で一端收束する。が、そのあとに『金剛般若波羅蜜經』法會因由分第一から書寫された別紙が貼り繼がれている。最後にはやはり題記があり、「布衣弟子翟奉達，依西川眞出本内抄得分數及眞言，於此經内添之兼遺漏分也」とあるので、これもやはり西川眞出本に基づき翟奉達によって書寫されたことが明らかである。翟奉達が亡き妻馬氏の亡七齋のために『閻羅王授記經』を書寫したことは先に述べた通りである。が、他方亡七齋は亡人は七分の一のみを享受できるだけで残りは亡七齋を設ける生きている者たちに將來されることを考え合わせれば、亡七齋はいわば預修生七齋を兼ねているといえよう。その意識の根底には亡人の追福を意圖しつつも自己の死後の救済という意圖も同時に有していたに違いない。八十老人書寫による一連の竝寫文書はこのような當時の共通意識を反映したのだといえよう²¹。

P2094「持誦金剛經靈驗功德記/ 開元皇帝讚金剛經功德」（908年）に見られる地獄における「免罪符」のような位置づけで捉えられる『金剛經』が『閻羅王授記經』と竝寫されたのはむしろ當然ともいえよう。あるいは竝寫された状況から逆に地獄からの救済として『閻羅王授記經』を書寫した意圖が却って明確にされうるともいえようか。

三、まとめ

前述したように十王經の成立と傳承については極めてシンプルな祖型に藏川が讚文を付し、それを受けて圖を付す形式へと擴張したという主張がこれまで大勢

²¹この老人の書寫意識の変遷を張（2001）96-98頁で詳細に検証している

を占めている。『道明還魂記』(S3092)に基づき道明蘇生の大暦13年(778)の後まもなく原型ができ、晩唐に流行した法照禪師の五會念佛の影響を受け讀誦のために成都府大聖慈寺の沙門藏川が讚文を撰述し、さらに張果老が各場面を畫いて繪解きによりさらに布教効果が期待できた、とするのは確かに非常に明快で理解しやすい展開ではある。

しかし、一方で文献資料に則して見る限り、このような單純明快な回答が得られないのも事實である。中村不折本の紀年は書寫年を記すのみで、寫した原本はさらに古い資料であったろうという考え方もできよう。が、それならば、同時期に先に見てきたとおり様々な形態の文書が並行して行われていたことをどのように考えるべきであろうか。

本稿では「勸善經」「新菩薩經」などの偽經の多くが自己救済のために書寫されたことを鑑み、これと同じ意圖を死後の自己救済という意味に於いて『閻羅王授記經』を書寫したものがあったと考える。いわば死後の天堂(天國)へのパスポートとしての『閻羅王授記經』の位置づけを行うのに際して、これまであまり視野に入れられてこなかったダイジェスト版の出現という可能性を考えるものである。とりわけ冊子形態で數種の(偽)經を竝寫した文書のなかには簡略化がかなり進んだものがある。例えば冊子本 S.5544 の總文字數が1378字であるのに對して附圖卷子本 P2003 が總文字數2363字である等、對照してその差を見れば明白である。

また圖と讚文との前後を言えば、もちろん基本の圖案が藏川の讚文をもとに作成されたのだとすることもできようが、十王のイメージが先行する可能性はなかっただろうか。具體的な繪付けの作業を考える上で、P.4523 と P.3961 のあり様を見ることは有効だろう。先にテキストありきではなかった事が良く分かる。

七七齋と生七齋という死後世界での救済をテーマとした同材料を、繪解きの材料にしたケース、亡人供養の意味で寫經したケース、自身の死後の安泰を祈っていわば天堂へのパスポートの意味合いで書寫したケース、様々な形態で同時期に存在していたと考えるのが自然であろう。とりわけ本稿では、あまり取り上げられることのなかった死後世界での救済手段としての寫經という面に焦點を當てて『閻羅王授記經』を再検討し、従來の研究とは異なる角度からの側面を明らかにできたように思う。

(作者は關西大學外國語學部教授)